

【研究概要】

非典型溶血性尿毒症症候群（aHUS）は、非常に稀な、主に補体の異常に起因する疾患であり、透析に至る割合は約50%程度であり、死亡率も25%と予後不良である。また診断には非常に特殊な補体調節因子の蛋白質解析（羊赤血球を用いた溶血試験）や遺伝学的検査が必要であり、外注では実施されておらず、大半の大学病院においては実施できない。東大病院で蛋白質学的診断、遺伝子診断実施することで、正確な診断へとつながり、迅速な治療を行うことが可能となる。